



多宗教世界における平和教育 ～キリスト者の観点からの考察～

教皇庁諸宗教対話評議会・世界教会協議会 共著



World Council
of Churches

原文ダウンロード元:

<https://www.pcinterreligious.org/education-for-peace-in-a-multi-religious-world>

Copyright © 2019 PCID/WCC Publications.

All rights reserved. Copies of this publication may be made for noncommercial use.

Scripture quotations are from the New Revised Standard Version Bible, © copyright 1989 by the Division of Christian Education of the National Council of the Churches of Christ in the USA. Used by permission.

Cover design: Albin Hillert and Sister Judith Zoebelin, FSE

Typesetting: Michelle Cook / 4 Seasons Book Design

Pontifical Council for Interreligious Dialogue

Via della Conciliazione, 5

00120 Vatican City

<http://www.pcinterreligious.org>

表紙のロゴの説明

このロゴは、多宗教的な地球を表します。複数のレイヤーの重なりや色相、様々なサイズなどの表現によって、多様性と多元性を示しています。わたしたちキリスト者は、イエス・キリストの愛の究極的な象徴である十字架をとおして、この多様性を理解し、この現実根ざした生き方をするようになります。

十字架は、死と命、憎しみと愛、暴力と平和、もろさと完全性、傷と癒し、破壊と回復、そして敗北と勝利を象徴します。つまり十字架は、傷つきながらも、平和と調和を求めて生きる今日の人類の希望を具現化しているのです。この傷ついた世界を癒すためにキリスト者が求められていることは、宗教の異なる人々と善意のあるすべての人々と共に、平和教育のためのツールを開発し共有することであり、またそれをこれからの世代にずっと引き継いでいくことです。

目次

前文	3
平和教育のキリスト教的基盤	4
平和構築のために教育をとおしてできること	6
提言	11

前文

「平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ5・9)」平和の構築者になるようにと、イエス・キリストの弟子たちすべてに向けて発せられたこの呼びかけは、わたしたちキリスト者にとっての名誉であり、召命であり、挑戦でもあります。キリストの山上の垂訓の冒頭という重要な位置にこの言葉がくることで、その重要性は強調されています。すべての宗教と精神的伝統に属する人々がこの世で平和の構築者となるよう招かれています。この呼びかけの緊急性と普遍性には疑いの余地がありません。

今日、目の当たりにする暴力には、貧弱な統治、汚職、セクト主義、過激な世俗主義、排他的国粹主義、人民主義運動、地方主義的支配、世界的経済的不平の高まりなど、様々な要因があります。現代における衝突の特定の側面のひとつとしてあるのは、「暴力」と「宗教」の間にある、明らかな、そして時に驚くような関連です。宗教は、世界の様々な地域で、対立、侵略、意図的殺人を正当化するために操られ、悪用されています。しかし、真の宗教の本質は、平和を促進するものです。そのため真正な宗教は、問題の一部ではなく、解決策のひとつなのです。

こうしたことを受けて、また、この現実に対応するために協働するキリスト者、宗教の異なる人々、すべての善意ある人々の倫理的責任を認識したため、教皇庁諸宗教対話評議会(PCID)と世界教会協議会(WCC)の諸宗教・対話と協働部門は、本文書を作成することにしました。本文書は、多様なキリスト教伝統の代表として、わたしたちが持つ共通財産を利用しながら、教育をとおして、この多宗教世界における平和構築に建設的な貢献をすることを目的としています。

人命の損失、家屋の破壊、財産とインフラ、移民と難民の危機、環境への影響、世代全体のトラウマ化、そして教育と開発を犠牲にしながら有限資源を浪費する武器の備蓄の促進——。こうした問題に特徴づけられた、わたしたちが置かれている今日の状況では、平和教育は緊急な義務となっています。マスメディアによる暴力に関する報道が増え、人々の中に恐れや嫌悪が駆り立てられるといった状況の中で、この任務はますます重要になってきています。

本文書の目的は、教会とキリスト教団体が、世界平和の崩壊につながっていった構造的要因を熟考すること、また教育と平和構築に関して彼らが現在取り組んでいる慣行と優先事項を見直すことを奨励することです。それと同時に本文書が、宗教の異なる人々やこの多宗教世界で社会的・政治的に活躍する人々とともに——特定の歴史的・文化的文脈を考慮に入れながらも——平和教育について、より幅広い会話をするための助けとなることを願っています。

平和教育のキリスト教的基盤

1. キリストはわたしたちの平和です(エフェソ2・14参照)。イエス・キリストと平和の間のつながりは、キリスト者の信仰の中心にあります。それはキリストの誕生、十字架上の死と復活、そして聖霊を送られた中に反映されています。キリストの誕生は、神的な平和の宣言によって特徴づけられます(ルカ2・14参照)。復活された主の、弟子たちへの最初の言葉と賜物は平和です(ルカ24・36、ヨハネ20・21)。それは特異な贈り物です——「わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。」(ヨハネ14・27)——それはキリストの平和が、悪と暴力をその根本から払拭するからです。

2. キリストの平和を賜物として受ける者として、キリストの弟子たちは平和の職人となるよう呼ばれています。平和の君であるイエスは、弟子たちを平和を与える者として遣わします。「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。(ルカ10・5)。」暴力に直面しても、イエスは最後まで非暴力の道を歩きました。さらに、イエスは弟子たちが自分たちの任務を遂行するために暴力を利用することや(ルカ9・54-55参照)、弟子たちがイエスの逮捕時に彼を守るために暴力を使うことを禁じました(マタイ26・52参照)。平和を宣言することは、「わたしたちの平和」であるキリストを宣言することです。教会のいのちを示すために弟子たちが与えられている聖霊の重要なしるしは「平和」です(ガラテヤ5・22参照)。またこの平和は、弟子たちがひとつの体としての召命を果たすことができるように、弟子たちの心を支配するものでなければなりません(コロサイ3・15参照)。

3. 平和は、本質的に義と正義に結びついています。なぜなら「正義と平和は口づけを」するからです。(詩編85・11)また平和は、すべての人が尊厳ある生活を送るために資源を持つ権利とも結びついています。聖書的な平和のビジョンの基となるヘブライ語の「シャローム」が意味するのは、すべての被造物の調和と繁栄です。それは神と自分の間の平和、自己の内の平和、他者間の平和、そして被造物と間の平和が、すべて相互に関連していることをわたしたちに教えてくれます。暴力行為が最初の創造に傷をつけた(創世記4・8参照)のと同じように、平和と知恵の存在は、新しい創造を象徴するものです(イザヤ11・6以下参照)。

4. 教育を大切にし、教育に価値を置くことは、キリスト教の伝統と実践の中枢に位置するものであり、こうした考え方の大部分は、聖書的知恵の伝統からきています。イエスと同時代の人々も、イエスが権威ある教師としてのふるまったことに注目しました(マタイ7・29、マルコ1・22)。御自分の教えに耳を傾ける人々の人生や生活状況を真剣に

受け止めるイエスの意欲を、イエスがたとえ話を教育手法としておもに使っていたことから見て取れます。「弟子」という言葉は——イエスに従う者にとって、極めて重要な新約聖書の用語ですが——「学ぶ者」としての彼らの役割を強調しています。

5. 「正しい関係の在り方の修復」としても理解されている平和ですが、平和は罪、赦し、そして和解の間にある、根本的なつながりをあらわにします。キリスト教的平和の理解の起源と中心は、キリストの十字架と復活のうちに見出すことができます。そして、教会のいのち——特に洗礼とエウカリスチア（感謝の祭儀）のうち、この平和理解の表現が今も脈々と受け継がれているのも見て取れるでしょう（エフェソ2・14-18参照）。キリスト者の和解という聖務において、神の恵みが果たす最たる役割を認識することは、わたしたちキリスト者が人類の歴史の中で、平和を築く者としての責任を果たせなかったことについて、自己批判的で正直でいなければならないことを常に思い出させてくれます。

6. 平和構築には、過去と未来の両方に注意を払うことが必要です。キリスト者の信仰は、過去の記憶を尊重し、癒す必要性があることを教えています——必要であれば、「赦し」とおして。キリストの苦しみ、死、そして復活という経験は、わたしたちに神との和解、そして他者との和解をもたらしながらも、わたしたちに異なる生き方をするように挑みます。「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。」（ローマ5・10）イエスの教えはまた、修復をもたらす正義の重要性を強調します（ルカ18・1-8参照）。過去の過ちを正すことは、未来に取り組むことと並行してなされなければいけません。そのような取り組みには、青年たちのための適切な教育への真剣な取り組みと、未来が、過去と現在の過ちを繰り返さないようにするという意欲が必要です。

7. 三位一体の神へのキリスト者の信仰は、神の三つの位格は実際に区別されていながらも、一つひとつの位格は、互いに関連していると教えています。これは、多宗教世界で平和を築くわたしたちのための動機付けとなるでしょう。三位一体の交わりというアナロジー（類推）は、キリスト者が宗教の異なる人々と関わる中で、交わりと特異性の両方を共存させるという模範的原型をもたらすでしょう。三位格の「家族」である、聖なる三位一体のうちには、本質的に、神性における一致と位格の区別があります。この「神の家族」は、内向きに閉ざされているのではなく、交わりに開かれています。神はわたしたちをこの交わりという現実にあずからせたいと願っているのです。わたしたちはひとつの人間家族なのです。わたしたちが互いに関わり、つながっている存在であることを理解するよう神は招き、またわたしたちが連帯と相互愛の中で生き、和解と平和のために働くよう励ましてください。

平和構築のために教育をとおしてできること

多宗教世界における平和教育は、あらゆる年齢層および社会のあらゆる部分を含まなければならないプロセスだと言えるでしょう。以下のステップのいくつかは、子どもたちに、また別の項目は青年たちに、そしてまた他の項目は大人に関連する事柄です。

1. 現代社会に適した教育を受ける権利

平和構築の基本原則としてあるのは、この現代社会で責任ある成人として貢献するために必要な教育を、すべての子どもたちが、男子も女子も、受けることができるという権利です。これが意味するのは、子どもたちの教育には、自然科学や社会科学、人文科学、そして現代の技術との実践的な関わりという探究も含まれていなければならないということです。宗教教育は重要ですが、より幅広い履修科目を排除もしくは削るなどして、宗教学習と実践のみに絞った教育システムは子どもの権利の濫用です。男子と女子の教育内容が、ジェンダーを理由に、宗教的に制限されることは同様に虐待です。一方で、反対に、教育における道徳的および人道的価値を伝える教育がほとんどなされていないという状況もあります。そのような状況下では、宗教共同体の意見が不可欠になります。

2. 包括的な教育

教育は、人間の人格全体の発達を支えなければいけません。したがって、教育には、身体的、知的、道徳的、社会的、そして精神的な側面を含む必要があります（ルカ2・52参照）。家庭はそのような包括的な教育において、初期段階から子どもと関わる最たる役割を担っており、それは健全な社会に貢献することのできる健全な人間になるように子どもを備えさせておくのに重要です。しかし、家庭における教育が包括的であり続ける一方で、子どもたちがより広い社会と建設的に、文化的、宗教的、政治的相違を尊重する姿勢で取り組むようになるためには、より幅広い枠組みによって徐々に補完されていく必要があります。教育システムは、社会の多様性を奨励し、異なる団体や共同体の間で効果的な出会いを可能にする機会を提供する必要があります。異なる宗教、民族からの出自、出身地、または文化を背景にもつ家族は、固有の課題を抱えてはいますが、学びのユニークな機会を周りに提供する可能性も持っています。教育プログラムは、人間の包括的な発展と、人権と、信教の自由への権利も含んだ、基本的自由の尊重の強化へと人を導くものでなければいけません。

3. 神の似姿として造られた人間のための教育

人間が、神の似姿として神にかたどられて創造されたという神学的原理（創世記1・27参照）は、教育方法論とその実践を満たさなければいけません。キリスト者にとって、この原則は人間本来の尊厳と価値を肯定するための基礎を形づくっています。したがって、教育を受ける子どもと若い人たちは、彼らが値する尊敬と尊厳を認められ扱われる必要があります。教育現場に暴力が入り込む余地はありません。こうした理由で、子どもの体罰は容認することはできません。また、子どもの健康と発達に有害となる、いかなる形での子どもの処罰も、彼らの尊厳と権利に反します。子どもや若い人たちの肉体的、性的、精神的虐待は、暴力は容認できるもの、もしくは正常であると見なす環境を作り出します。教師は、担当する子どもたちに対する自分の行動をとおして、また平和構築という旅路を共に歩み、人と人の間、共同体との間の相互尊重を育む中で、信頼のおける模範となるよう呼ばれています。

4. 教師の手本としてのイエス

「ラビ」と呼ばれる教師として（マルコ9・5、マタイ26・49、ヨハネ1・38、3・26）、イエス・キリスト御自身が、教育者のための特異な模範を示しています。彼が関わった人々に対して示された心遣いと愛に溢れた同伴は、イエスの聖務の明らかな特徴でした。イエスは御自分が教えられた人々との対話を大切にしていました。単に答えを与えるのではなく、彼らに対してたびたび質問をしました。聞き手が置かれている状況に心を留め、たとえ話で教えるというイエスの特徴的な手法は、聞き手自身が、学びに積極的に参加するよう彼らを招きました。文化的影響により、子どもやその他の学習者が質問をするのを時に妨げるような学習環境では、このような帰納的学習法は今日、とりわけ重要です。すべての学習者が、批判的思考と理性的な物事の考え方を身に着ける必要があります。民俗に伝わる知恵、たとえ話、なぞかけや物語などはそのような学習プロセスをうながすため、こうしたものも平和教育に含まれるべきです。本を使わない教育方法や芸術、音楽、スポーツなどそのほかの学びも、人間性を豊かにし、高めることができます。キリスト者の聖書の中で「知恵」に大きな価値が置かれているという事実は、教育が、心と体と精神すべてにかかわるものであり、単なる知識を獲得させるためのものではないことを思い出させてくれます。

5. 生涯養成とすべての人から学ぶこと

教えることは同時に、他者に耳を傾けることと学ぶことを必ず含みます。わたしたちすべてに学ぶべきものがあるという認識は、教育が常に他者に開かれたものであるために重要なことであり、この認識は平和構築には不可欠です。宗教指導者に任命された人々は、生涯を通して学び続けることが良いものとして認識され、讃えられる文化を取り入れ、育んでいく必要があります。教育、権力、そして平和構築の間にある関係は複雑です。指導者もまた、学習者でなければいけません。弟子たちが学ぶべき模範として、イエスが子どもを示されたことを忘れてはいけません（マルコ10・15参照）。教育は包括的なプロセスとなる必要があり、特に、女性と子どもの役割を認識するものでなければいけません。そのため、諸宗教の集いにおける人生の対話が果たす役割は、より多くの相互的・包括的な学習の可能性をもたらすものとして認識される必要があります。

6. 平和と真の力

聖書を通して啓示される平和は、単なる戦争の欠如以上のものです。聖書的な平和とは、すべてのいのちと正しい関係の在り方の繁栄をその特徴とします。キリスト者は、平和、正義、そして和解の間に本質的なつながりがあると断言しています。権力の乱用は紛争、不平等、そして差別の中にしばしば見られるものですが、そのため、平和教育は権力問題に対する取り組みも含んでいなければなりません。暴力と紛争という状況の中で平和を築くということは、声なき者との連帯のうちに、力のある者に対し、非暴力的な手段をとおして真理を伝えることも意味します。わたしたちは、愛をもって真理を語るように呼ばれています（エフェソ4・15参照）。教育は、謙虚さと奉仕という観点から、リーダーシップと権力の概念を形づくるのを助けなければいけません（マルコ10・45参照）。自己反省的態度と赦しをうながし、他者との協力を促進し、傲慢を防ぎ、それを克服するのを助けなければいけません。教育方法論は、健全な競争と同様に、他者との協力を促進させるべきです。

7. 他者について学び、他者を守り、他者の人格を認めること

民族や宗教において自分とは異なる人々——しばしば「他者」と呼ばれますが——に対する良い見方を、教育はうながす必要があります（マタイ7・12参照）。特定の宗教や民族団体が教育システムや履修過程を独占している状況で、他宗教や少数派共同体に関する不適切、または不正確な情報提示が行われている場合、こうしたことに対処する必要があります。このような少数派に対する偏った物の見方は、宗教教育のカリキュラムだけでなく、歴史や文学などの他科目の内容にも影響を与える可能性があります。こうした状況は、「他」の共同体に属する人々が、完全な、もしくは同等な国民では

なく、国の建設に貢献しないというような誤った認識を助長させる可能性があります。すべての国において、他者の宗教や経験について学ぶことが、教育の一部として含まれていることが不可欠です。他者である当事者がその教育課程に貢献できるような形が望ましいでしょう。曲解や軽視を避けるためには、少数派の宗教共同体の信仰や歴史を教えるために使われる教科書は、その共同体の代表によって書かれているものであるか、少なくとも彼らに内容を確認してもらう必要があるでしょう。さらに言えば、すべての宗教共同体のメンバーは、自分自身の宗教伝統の中でしっかりとした信仰養成を受ける必要があります。また、諸宗教対話をうながす基礎として、他者に関する正しい情報を受ける必要があります。自分の属する宗教伝統について学ぶときには、優越感を抱くことなく、学ぶ必要があります。

8. 平和教育におけるメディアの使用について

「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネ8・32)。コミュニケーションは、神の御計画の一部であり、それは人間を真理の認識と、自由と普遍的な兄弟愛の肯定に向かって導くためのものです。不和と紛争を助長するために情報通信技術が悪用されることはよく知られていることです。したがって、このマスコミュニケーションの時代においては、地域のニーズや実用性を考慮しながら、平和教育の手段としてソーシャルメディアや他の通信手段を積極的に利用することが大切です。これは、「フェイクニュース」の広がりに対抗するためにも不可欠です。この点で、偏った根拠のない情報や、外国人嫌悪に満ちたニュースなどを見極めるスキルを培うという教育プログラムを作成することが重要です。

9. 聖書から学び、聖書とともに学んでいくこと

子どもたちや青年たちと同様に、大人も、それぞれの聖典に真剣に取り組む必要があります。これは平和教育においても大切なツールです。しかし、世界のほとんどの宗教の聖典には——これにはキリスト教の聖典も含まれますが——差別や暴力を容認、またはそれを奨励していると読み得る、または実際によくそう解釈されてきた箇所があることも認識しなければなりません。そのような状況において、平和教育は聖典の難解な文章の批判的熟考をうながし、解釈のパターンと実践を再考することを支えるべきです。また聖典に対する包括的でポジティブなアプローチも奨励するべきです。聖書を学ぶということは、単に言葉を唱えることや特定の箇所を暗記する以上のものでなければいけません。それは、キリスト教の伝統が聖典を解釈する手段として発展させてきた方法論と取り組むことも意味するのです。イエスと福音がなければ、わたしたちはキリスト者ではありません。そのため、キリスト者の聖典において福音書がもつ優位性、そして聖

書の他の部分を福音の光の下に読む必要性を認識することは、キリスト者にとって聖書解釈の重要な原則です。異なる宗教には聖典を解釈するためにそれぞれ独自の基準があります。キリスト者であるわたしたちは、信条が異なるキリスト者や宗教の異なる人々とも、これまで培われてきた聖書の解釈法を共有する必要があります。宗教の異なる人々の聖典の解釈法からも学ぶこともできます。昨今出てきた“**Scriptural Reasoning**”法は、この共有学習が行われている、ひとつの場です。

10. 礼拝、霊性と平和教育

礼拝と霊性は、その教訓的な性質と人を変えてしまうほどの影響をもつ性質のために、平和教育において重要なツールです。公に行われる礼拝は、平和構築という運動を前進させる多くの機会を提供しますが、近年起こった出来事から、それが紛争の潜在的な推進力になり得ることもわたしたちは知っています。信仰者が意識していなくても、礼拝はその人の態度や行動を形づくります。特定の聖句、宗教的な文書、内省、説教や祈りは、平和を築くのを助けることもできるし、敵意と対立の感情へと導くこともできます。真正な祈りによって、わたしたちは自分たちの失敗に気づき、自らが神の恩寵と回心を必要としていることをもっと意識するようになります。祈りはそれゆえ、原理主義と宗教団体によって引き起こされた暴力への対抗策となることができます。石の心を肉の心に変えることができます（エゼキエル36・26参照）。また逆に、平和構築と、エウカリスチア（感謝の祭儀）がもつ可能性との間にある関係を深める必要があるでしょう。

記憶を清め、浄化させ、新たにし、人類のための神の御計画のより壮大な枠組みへと人の目を向けさせる——わたしたちキリスト者の礼拝におけるキリストとの交わりの中心にあるものはこうしたことです。平和の挨拶は、感謝の祭儀の典礼の不可欠な部分であり、それは平和と和解の、目に見える力強いシンボルを提示します。典礼の終盤で、わたしたちは、礼拝を通して体験した平和を他の人々と分かち合うために派遣されます。自分の霊性を育むことは「変容のわざ」です。それは、一個人の「変容」から始まり、やがて、すべての人類の和解、それから地球の癒しへと広がっていくプロセスです。神との対話を通して、わたしたちは「新しい天と地」への希望を表しはじめるようになります（黙示録21・1）。このようにして、わたしたちは平和な世界の基礎を築くのです。

11. 予防と和解

平和教育が効果的であるためには、暴力の予防と和解の促進をその目的とする必要があります。真実を語ることや記憶の癒しを含むプログラムは、この点で特に効果

的であることが証明されています。癒しに焦点を当てた平和教育は、暴力の犠牲者が肉体的、心理的、そして感情的なトラウマを克服し、彼ら自身がやがて和解を促進する者になることを可能にします。十字架にかけられ、その傷をつけたまま復活されたキリストは、新しい創造という約束を今も果たします。キリストは彼に従う者たちに、御自分に倣い、和解の大使となるよう求めています(2コリント5・18-20参照)。

12. 開発とエコロジカルな視点の統合

平和は持続可能開発と被造物の完全性に関連しています。不平等と「無関心のグローバルイゼーション」という今日の状況は、平和に対する大きな脅威です。それゆえ平和教育では、発展の視点とエコロジーの視点を統合する必要があります。こうした視点は貧困と不正を根絶し、環境を保護し、一人ひとりの、そして人間の完全性の発展を確実にし、被造物全体の調和と安定を促進することを目指すものでなければいけません。今日のエコロジーの危機は、自我の危機であり、それは平和とすべての人の至福にとって、深く有害なものです。気候変動が「わたしたちの共通の家」である地球にもたらす脅威は、平和教育の不可欠な側面として、エコロジーへの取り組みも教育内容に含むようにわたしたちに呼びかけます。わたしたちと神、人間、そして自然との関係についての新しい、相互に関連した考え方を促進する教育プログラムを導入する必要がありますでしょう。このような教育は、家庭、学校、宗教の共同体、職場、メディアなど、さまざまな場面に取り入れることができるでしょう。

提言

教皇庁諸宗教対話評議会と世界教会協議会の諸宗教対話と協働部門は、祈りに満ちた内省のために、本文書を、教会共同体、キリスト教系教育機関、そして全国的、および地域的な宗教団体とエキュメニカル団体に提供します。こうした人々に向けて、わたしたちは以下を提言します。

学ぶこと——本文書を熟読し、どのような平和教育の方法が効果的で、状況文脈に適切であるかを熟考しましょう。その方法が民族的、宗教的、文化的、そして世代間の要因を考慮した、エキュメニカル、または可能であれば諸宗教対話として実施ができるようなものであることが必要です。

発展させていくこと——平和構築に不可欠な知識、態度、価値観の促進だけでは

なく、こうしたものを具体的な行動や実践へと善意と共に変換するためのスキルを開発すること——こうしたことに焦点を当てた教育資源と教育課程を発展させていきましょう。平和教育のためには、行動変容の能力を高めることが不可欠です。これは、紛争の予防と平和的解決という要素を含めたものでなくてはなりません。

人材を探し出すこと——家族、宗教共同体、教育機関、そしてより幅広い社会といった様々なレベルに向けた教育ツール——創造的かつ双方向的で、学習者中心のもの——を開発できる協力者を探し出しましょう。暴力に対抗し、平和を築くためには、こうした教育ツールは、伝統的な平和構築の手段とインターネットやソーシャルメディアといった現代的な平和構築の手段の両方に注意を払ったものでなければいけません。

問題を考察し、挑むこと——特定の社会や異なる人々の間で暴力の原因となっている過去および現在における構造的要因を検討して、問題に挑みましょう。そして、宗教、経済、政治、ジェンダー、文化やエコロジーに関する様々な問題が、暴力と紛争の種をまくことを考慮しながら、平和教育の統合的アプローチを開発していきましょう。

奨励すること——キリスト教的精神に基づく教育施設や教会機関、特に子どもや青年向けのカテキズムのプログラムを提供する機関に対して、霊的および人間的養成の中に、平和教育の要素を含めるよう奨励します。

識別すること——聖書読書への献身、公に行う礼拝、祈り、典礼などの宗教的生活の要素が、より公正で平和な社会のための人間の連帯を培うのにどれくらい貢献できるかを見極めます。

要求すること——ミッション、改宗、そしてプロセリティズム（他者に改宗を迫る行為）に関する異なる見解をもとに広げられる論争を克服するために、世界中のキリスト者の有識者に『多宗教世界におけるキリスト者の証し：信仰の実践のための提言（2011年）』¹を祈りながら研究することを要求します。キリスト者の不一致は世をつまずかせ、

¹ 『多宗教世界におけるキリスト者の証し：信仰の実践のための提言（2011年）』（非公式邦訳）
<https://www.christiantoday.co.jp/articles/13986/20140905/christian-witness-in-a-multi-religious-world.htm>

教皇庁の公式文書・英語版→

http://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/interelg/documents/rc_pc_interelg_doc_20111110_testimonianza-cristiana_en.html

共にあかし人となるということを妨げ、共に平和を構築していくことを不可能にします。こうしたことを認識することは重要なことです。

思い起こすこと——正義と平和、そしてエコロジーに関する問題に、エキュメニカル、もしくは宗教間対話的に取り組んできた、素晴らしい人々の人生の物語を思い起こしましょう。こうした人々が、それぞれ特有のキリスト者のアイデンティティ、もしくは異なる宗教のアイデンティティに深く根ざしながらも、平和と正義に関する共通の倫理的ビジョンをどのように共有してきたかを学ぶことは大切なことです。

政府に要請すること——基本的人権を強化し、すべての人の尊厳を守り、不正と差別を払拭し、正当な相違を尊重し、他者へとより開かれた心を形成していくこと——こうした目的のための手段として、平和を促進し優先するような教育を形づくっていくよう政府に要請しましょう。

祈ること——平和をもたらすために共に祈ること。祈りは、わたしたちの良心を目覚めさせ、内なる恐れを取り除き、傷を癒し、暴力的な心を溶かし、敵意の壁を取り壊し、ゆるしと赦しをうながし、和解をもたらし、苦しみ叫ぶ声に心を開き、社会的罪を根絶するようわたしたちを駆り立てます。そして、わたしたちがすべての人を兄弟姉妹として見ることができるようにし、わたしたちを平和の構築者へと変えてくれます。

2019年5月21日発行